

報告書

岡山大学文学部講演会（文学部プロジェクト「東アジアにおける表象観念」共同研究）

蓮華と十字架—中国とインドにおける初期キリスト教遺跡—

講演者：ケン・パリー博士（シドニー、マッコーリー大学）

日時：9月7日（月）：午後3時から5時20分まで

場所：岡山大学文法経講義棟第19番教室

<講演会案内文>

キリスト教はインドに6世紀、中国に7世紀に伝わります。ここでは、「十字架」に「蓮華」が組み合わされて墓碑に刻まれるようになり、見事にアジアの宗教とキリスト教が融合していました。

<報告>

遊佐徹准教授の司会で始め、辻星児文学部部長の挨拶があり、パリー教授の講演となりました。通訳は鐸木道剛准教授が行った。講演はパワーポイントにより、原稿なしで行われたため、ほとんどセンテンス毎に区切って通訳された。

講演内容は以下の通り。中央アジア（トルファン、敦煌）から、中国北部（西安）、中国南部（泉州）、そしてインド南部の順にたどって、キリスト教の遺物を紹介した。まず、初期キリスト教で見られた十字架と植物文様の組み合わせが、アジアでは十字架が蓮華と組み合わせられ、その最初の作例が781年の大秦景教流行中国碑（1625年西安発見）であるとの指摘がなされた。また十字架を両側から崇める天使が天女に変えられる。重要なのは、中国に伝わって唐の時代に盛行したキリスト教は景教と呼ばれ、景教すなわち、異端とされたネストリウス派のキリスト教のこととされるが、唐時代のキリスト教は大秦（ローマ、ペルシア、あるいはメソポタミアを指す）教また波斯（ペルシアを指す）教とも呼ばれており、シリアから伝わったキリスト教としか判断できないのであり、異端のネストリウス派であるとの判断はヨーロッパの名付けと判断でしかなく、実際はそれぞれの時代と地域のキリスト教に即して判断されねばならないことが強調された。

唐の後には元時代にキリスト教の遺物が多く残っており、也里可温（Yelikowen）教と呼ばれ、今なおその名の由来と意味は不明のままである。十字架と蓮華の組み合わせのモチーフは、元時代の泉州からも多数の墓碑が出土し、現在、マッコーリー大学の調査グループによって調査中であり、出版が予定されていることが報告された。ここには十字架と天女のモチーフもある。当時の泉州にはジェノヴァの船も来航するなど、マルコ・ポーロも記すように通商が栄えており、様々な宗教が混在していた。最近の調査で今は仏教寺院であるが、もとマニ教（明教）であった寺院もわかっている。また泉州だけでなく上海の北西の揚州にも、14世紀のラテン語の銘文を持つ墓碑が発見されている。インドでは半島南部のチェンナイやケララ州のコーチヤコッタナムに、ポルトガル時代の前後に十字架と蓮華が組み合わされた装飾モチーフが十字架の台座などに多数見られる。このように十字架と

アジアの蓮華のモチーフとの組み合わせは、中国の北部から南部、そしてインドに見ることができる。シリアから伝わったアジアのキリスト教の広がりについて、最近の発見は著しく、そのキリスト教がネストリウス派の異端であるとの先入観を捨てて、それぞれのキリスト教内部で、そのあり方を研究できる時期に来ている。これからの研究の進展とその成果が期待されると結んで講演は終了した。

講演後の質問は 30 分以上活発になされ、2 名の学外の参加者から敦煌のキリスト教文書と蓮のモチーフの仏教以前のインドでの意味についての質問があった。学内では歴史学の佐川准教授から東洋史学の観点からの質問とコメントがあった。まず神学研究者ゆえのパリー氏の東方キリスト教への斬新な視野を前提としたうえで、今回扱われた歴史資料が中国にあるものであるゆえに、資料のあり得る改竄と贋作を避ける手続きが最低限必要であることの注意が促された。パリー教授も泉州の海外交流博物館にはレプリカが多く、現物は北京にあることが多い状況を語られ、資料についての慎重な真贋の確認の必要性を改めて指摘された。

なお大学外への広報は、山陽新聞（9 月 3 日）、朝日新聞（9 月 4 日）に講演会の案内を掲載し、聴衆は学外からも含めて総数 35 名であった。